

リスクを小さくし

安定したリターンを得る方法がありますか？①

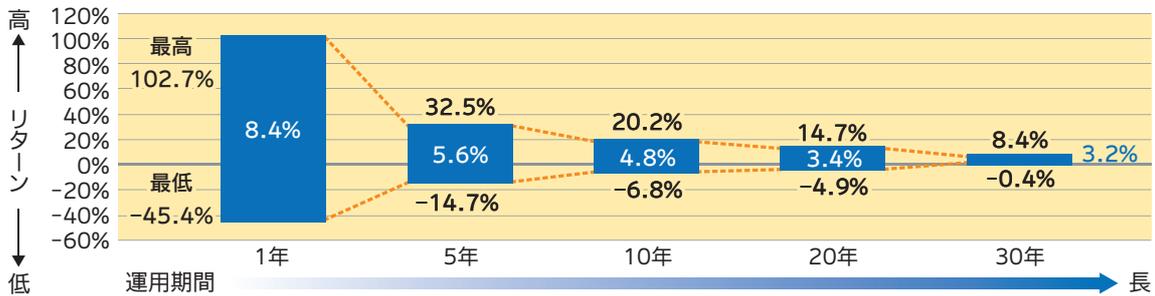
Point

「長期投資」には、
リターンを安定させる効果があります

■ 長期投資

- 運用を行う場合、運用期間を長くすることにより、運用成績の良い時と悪い時がならされ、平均的なリターンのブレ幅(リスク)が小さくなる傾向があります。
- 短期間ではリターンのブレ幅が大きい運用商品でも、「長期投資」を行うことで安定したリターンを得られる効果があります。
- DC制度では、老後に向けた資産形成を目的にしているため、運用期間は長期におよびます。

■ 国内株式の運用における長期投資の効果



※このグラフは、1970年4月から2021年12月までの国内株式の指標(1970/4~1989/1: TOPIX、1989/2~TOPIX(配当込))のデータをもとにしています。各運用期間ごとのリターンを算出し、リターンの最高値と最低値を棒グラフ化したものです。

※棒グラフ中央の白抜き数値は、各運用期間における平均リターン(リターンの単純平均)です。

短期間で
一喜一憂
しないことが
大切です。

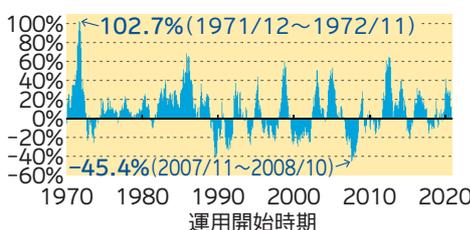


まとめ

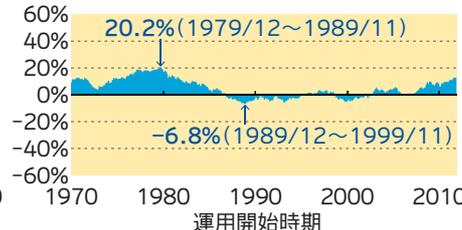
短期的な値動きに惑わされることなく、
中・長期的に運用を考えることが基本です。

データ

■ 運用期間 1年の場合



■ 運用期間 10年の場合



左記グラフは運用期間が1年と10年のリターン実績を運用開始時期ごとに表示したものです。運用期間を長くすることにより、リターンが安定していることがわかります。

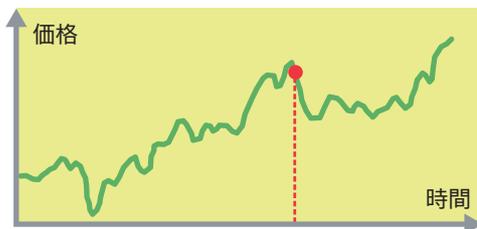
リスクを小さくし 安定したリターンを得る方法がありますか？②

Point

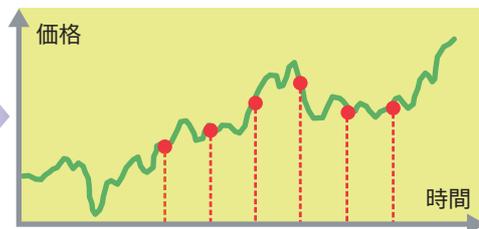
「分散投資」には、
リスクを小さくする効果があります

■時間の分散(積立投資)

一点集中するのではなく…



何回かに分けて買う!



何回かに分けて買う(積み立てする)と、購入価格が分散されます。
DC制度では定期的に拠出される掛金で運用商品を購入し、時間の分散が行われています。

■投資対象の分散

もしもの時でも、異なる投資対象を組み合わせることによってダメージを少なくできます。

卵をひとつのカゴに盛っておくと、もしもの時に全て割れてしまうかも知れません。



別々のカゴに分けておくことで、もしもの場合に備えることができます。



分散投資は、
運用を行ううえで
重要な
ポイントです。



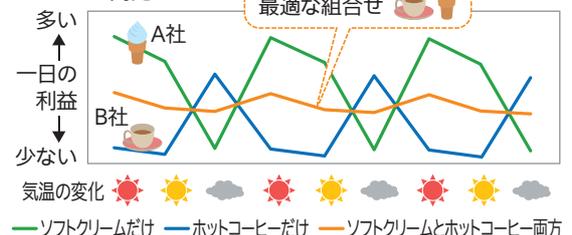
まとめ

DC制度には、時間分散のしくみがあります。
投資対象の分散をどのようにするかが、
運用のカギとなります。

✓ チェック

- 投資先の分散をどうするか?食品メーカーに投資する場合を例に考えてみます。
- カフェで暑い時に売れるソフトクリームを作っているA社と涼しい時に売れるホットコーヒーを作っているB社の2社があったとします。
- A社にしか投資していないと、涼しい日が続いた場合、利益が得られません。しかし、両方の会社に分散投資しておくと、暑い日でも涼しい日でも安定的に利益を得やすくなります。

カフェでの商売



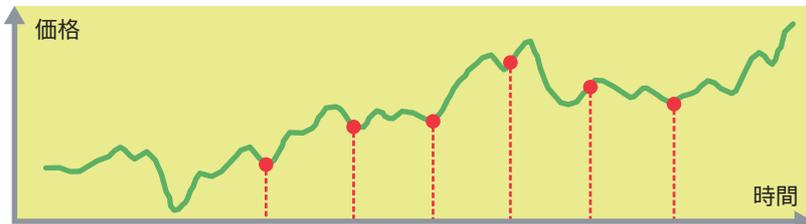


長期投資・分散投資

■時間の分散(積立投資)

ドル・コスト平均法

- 時間分散した一定のタイミングで、一定の金額を同一の運用商品に積立投資していく手法を「ドル・コスト平均法」と言います。
- 基準価額が下がったときに購入し、基準価額が上がったときに売却すれば収益を得ることができます。しかし、購入や売却のタイミングを適切に判断することは専門家でも難しいものです。ドル・コスト平均法はタイミングと投資金額を一定にすることにより、購入単価を平準化させる効果をもつものです。
- DC制度では、定期的に拠出される掛金で、同じ商品を一定金額ずつ買い続けることによって、時間の分散が行われています。



ドル・コスト平均法では、基準価額が高いときに少ない口数を購入し、基準価額が低いときに多くの口数を購入します。結果としてこの例では一定の口数で購入するよりも平均単価が低くなっています。

	基準価額 (1万口あたり)	8,000	9,500	10,000	12,000	11,000	10,800	合計	平均単価 (1万口あたり)
金額		8,000	9,500	10,000	12,000	11,000	10,800	61,300	10,217
口数	一定	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	60,000	
金額		10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	60,000	10,049
口数		12,500	10,526	10,000	8,333	9,090	9,259	59,708	

低い **ドル・コスト平均法**

■投資対象の分散

- 国内外の株式や債券に集中投資した場合と、4つの資産に均等に分散投資(四資産分散)した場合の、毎年のリターン順位をシミュレーションしたものです。
- **四資産分散**の順位は他の資産の順位変動に比べて、ほぼ中位となっています。投資対象を複数の資産に分散することで、各資産の値動きが相殺され、リターンを安定させる効果があることがわかります。

年度ごとの各資産のリターン順位

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
①位	外国株式 26.2%	28.0%	30.7%	5.4%	14.7%	15.9%	7.1%	5.5%	53.9%	23.8%	5.8%
②位	国内株式 23.8%	18.6%	22.7%	▲3.1%	12.0%	8.5%	3.0%	▲0.2%	42.1%	6.6%	0.2%
③位	外国債券 18.2%	15.5%	17.1%	▲5.6%	5.9%	4.8%	2.0%	▲4.0%	23.1%	2.5%	▲1.0%
④位	四資産分散 18.2%	15.0%	12.9%	▲10.8%	▲1.2%	3.2%	1.9%	▲9.5%	3.9%	2.0%	▲1.7%
⑤位	国内債券 3.7%	0.6%	3.0%	▲11.5%	▲4.5%	0.9%	▲5.0%	▲12.8%	▲0.7%	▲1.2%	▲2.9%

<出所> 国内株式: TOPIX(配当込)、外国株式: MSCI-Kokusaiインデックス(円ベース・配当なし)、
国内債券: NOMURA-BPI総合、外国債券: FTSE世界国債インデックス(除く日本・円ベース)
四資産分散: 国内株式、外国株式、国内債券、外国債券の4資産に25%ずつ投資したポートフォリオ
期間: 2012年度~2022年度(4月~翌年3月)

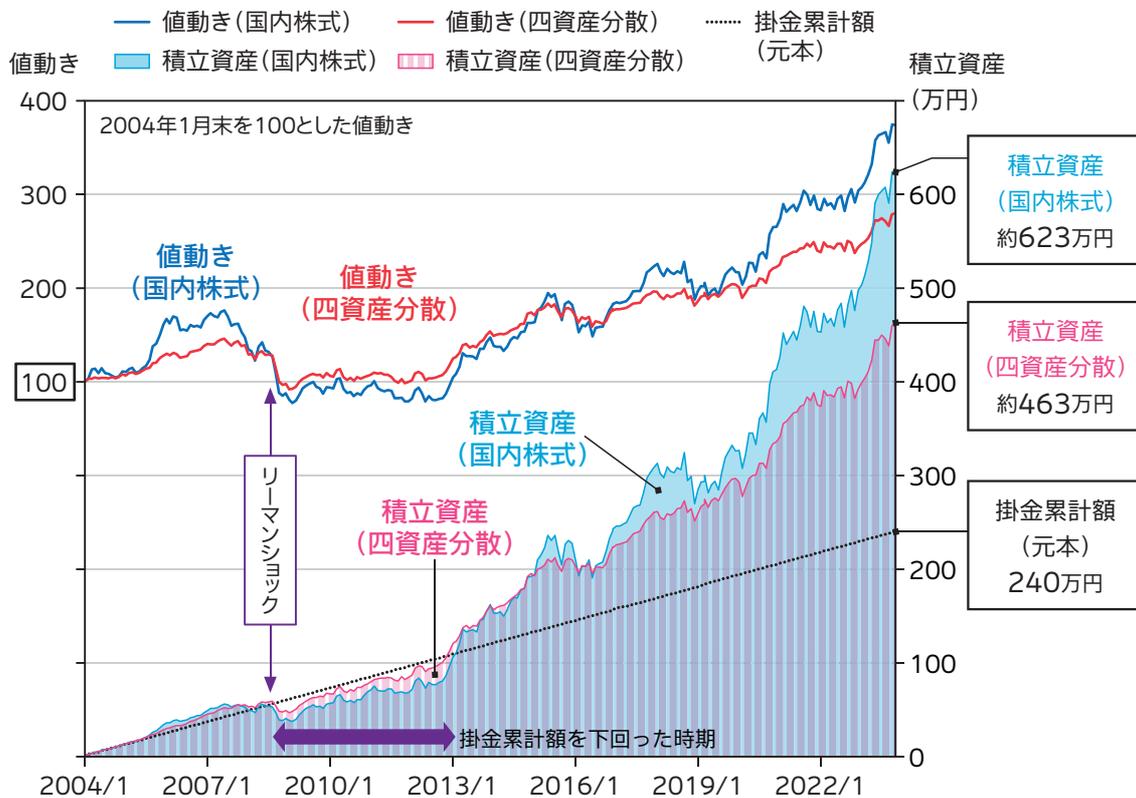
特定の商品ではなく、市場の値動きをあらゆる指数データを用いて計算し、投資にかかる費用や税金は考慮していません。

■長期投資+分散投資(投資対象の分散+時間の分散)

長期投資と分散投資の組合せを過去の実績をもとにシミュレーションしたものです。
シミュレーションの期間には市場の急激な変動時期を含めています。

- 【長期投資】運用期間20年間。市場の大きな変動があった2008年のリーマンショックの前後。
【投資対象の分散】国内株式、外国株式、国内債券、外国債券の4つの資産に均等に分散投資(四資産分散)。
※特定の商品ではなく、市場の値動きをあらゆる指数データを用いて計算し、投資にかかる費用や税金は考慮していません。
【時間の分散(積立投資)】毎月1万円を積立

- 国内株式と四資産分散ともに2008年のマーケットの下落により、積立資産は元本を下回りましたが、その後の上昇により収益を得ています。
- 四資産分散の積立資産の動きは、国内株式と比べて変動幅が抑えられ安定しています。



2004年1月末～2023年12月末まで

左目盛: 2004年1月末を100とした値動き 右目盛: 毎月1万円を積立した場合の資産額の推移

<出所> ●国内株式: TOPIX(配当込)、外国株式: MSCI-Kokusaiインデックス(円ベース・配当なし)、
国内債券: NOMURA-BPI総合、外国債券: FTSE世界国債インデックス(除く日本・円ベース)

- 四資産分散: 国内株式、外国株式、国内債券、外国債券の4つの資産に25%ずつ投資し、上記の指数を用いて毎月末リバランスしたものととして算出

◆本図表は、情報提供を目的としてS O M P Oアセットマネジメント株式会社が作成した資料であり、投資勧誘を目的として作成したものではありません。

◆本図表は、S O M P Oアセットマネジメント株式会社が信頼できると判断したデータにより作成したのですが、その正確性および完全性に関して責任を負うものではありません。

この情報は投資判断の参考としての情報提供を目的としたものであり、特定の運用方法・商品の推奨・投資勧誘を目的としていません。記載内容は作成時点のものであり、将来予告なく変更される可能性があります。また、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。